


## 2022 年度 研究サマリー

研究会名称	愛知腎移植・免疫研究会	
代表者所属	藤田医科大学 腎泌尿器外科	
代表者氏名	星長 清隆	
研究方法・結果	<p>当院で行う腎移植 特に献腎移植の治療成績向上を目的として後方視的研究を行った。</p> <p>研究の内容は</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 当院から提供した献腎移植の移植成績と移植腎生着に影響を及ぼす因子の検討。</li> <li>2. 腎移植後の移植腎生着に影響を及ぼす因子の検討</li> <li>3. 生体腎移植におけるドナーの調査 等である。</li> </ol> <p>1に関しては米国で報告されているドナー評価 (Kidney Donor Profile Index (KDPI), Kidney Donor Risk Index (KDRI) を用いて有用性を再評価した。さらに当院の検討ではさらに温阻血時間 (WIT) を検討する必要があることを新たに見出した。</p> <p>2に関しては移植腎予後を左右するレシピエントの死因として悪性腫瘍、心血管イベント、感染症があげられる。悪性腫瘍の早期発見に関連して、末梢血を用いたマイクロアレイによる網羅的遺伝子解析を行い有用性につき検討した。さらに詳細な検討を追加したところ mTOR 阻害薬を新たに免疫抑制剤として追加した症例では、追加然と比較して遺伝子発現の亢進数が低下するという新たな知見を得た。</p> <p>3に関しては生体腎ドナーの長期観察報告は全国的にも少ない。当院で長期経過を見ている症例では併存症の発症は少ないものの、若年時に腎提供を行っている症例では、腎機能維持や高血圧等の併存症に対して長期にわたる経過観察を要すると推測される。</p> <p>しかし、本年度も COVID-19 の影響により、レシピエント及びドナーの来院が困難な状況が続き、研究が予定どおり行う事が出来なかったが、2022 年 6 月 16 日 (木)、17 日 (金) 第 37 回 腎移植・血管外科研究会を会期中に当研究会の企画としてランチョンセミナーを行った。</p> <p>臓器提供推進活動の再活性化を目指した地域活動や献腎移植におけるドナー評価の限界及び machine perfusion (MP) に対する期待など今までの研究内容及び、今後の課題を議論することができた。</p>	
研究成果 (論文、学会発表、雑誌掲載等)	<p>当科での腎移植ドナーのフォローアップの現状/第 55 回日本臨床腎移植学会/2022/2/23</p> <p>腎移植における liquid biopsy の展望/第 55 回日本臨床腎移植学会/2022/2/23</p> <p>献腎移植におけるドナー評価の限界と machine perfusion (MP) に対する期待./ 第 37 回腎移植血管外科研究会/2022/6/17</p> <p>心肺停止下献腎移植の不易流行./ 第 72 回日本泌尿器科学会中部総会/2022/10/6</p>	